



2021年度日本語教育学会 各賞受賞者・受賞論文

理念体系の策定過程における事業再編で、学会の表彰事業を所掌する表彰委員会が設置されました。学会の「事業の3本柱」である学術研究・教育実践・情報交流の促進という事業方針を念頭において、各賞の位置づけや選考基準が明確になりました。新制度における各賞の表彰の対象者及び選考基準は、以下のとおりです。

学会賞：日本語教育に関してめざましい業績・成果があり、今後も活躍が期待される学会の個人会員に贈られます。

奨励賞：日本語教育に関して注目すべき業績・成果があり、将来の活躍が期待される学会の個人会員に贈られます。

功労賞：日本語教育界において長年の業績があり多大な貢献をした個人または団体に贈られます。

『日本語教育』論文賞：各年度、学会誌『日本語教育』に掲載された研究論文、調査報告、実践報告のうち、特に優れていると認められた論文に贈られます。

学会活動貢献賞：日本語教育学会の学会活動に貢献した個人を表彰することを目的とし、隔年で対象を変えて表彰します。今年度は、学会の役員・代議員・評議員・委員として一定の年数を歴任した学会の個人会員に贈られます。

各賞の選考過程

①学会賞・奨励賞・功労賞は、理事・監事・代議員・委員会委員の推薦を受けた候補、②論文賞は、学会誌委員会に置かれた候補論文選考部会の推薦を受けた候補論文、③学会活動貢献賞は、客観的なデータに基づき、表彰委員会の推薦を受けた候補が、会長・理事・代議員・各常置委員会委員より構成される授賞候補選考委員会に提出されました。授賞候補選考委員会の最終選考の審議を経て、理事会で最終的に決定しました。

2021年度の各賞の受賞者・受賞論文及びその授賞理由を、次ページよりご紹介します。

受賞者の皆様、おめでとうございます。益々のご活躍をお祈りいたします。

2021年度 日本語教育学会 学会賞

受賞者 かみよし ういち
神吉 宇一 氏

【授賞理由】

神吉宇一氏は、日本においてどのように多文化共生社会を実現するかという問題意識をもって言語政策や地域の日本語教育などの幅広い分野で、精力的に研究及び社会的活動をなさっています。

神吉氏は、財団法人の上席日本語専門職、民間企業の日本語教育事業開発アドバイザーなどを経て、現在、武蔵野大学グローバル学部日本語コミュニケーション学科で准教授として研究・教育に携わっています。

氏の日本語教育学への貢献において特筆すべきこととして、研究と実践を往還させながら、言語教育を越えた幅広い社会実践を含む教育活動として深化させている点が挙げられます。さらに氏は、隣接領域を含む他分野の研究者と協働し、研究及び実践に取り組んでいます。それにより研究は説得力を持ち、実践は理論に裏打ちされ、新たな展開の可能性を広げてきました。

論文としては「共生社会を実現するための日本語教育とは」（『社会言語科学』24巻、2021年）や「国内における地域日本語教育の制度設計－日本語教育の推進に関する法律の成立を踏まえた課題－」（『異文化間教育』52巻、2020年）、共著「就労現場の言語活動を通じた第二言語習得過程の研究－『一次のことばと二次のことば』の観点による言語発達の限界と可能性－」（『日本語教育』146号、2010年）などがあります。また、次の書籍でも、その取り組みと成果を著しています。本田弘之・松田真希子編『複言語・複文化時代の日本語教育－わたしたちのことばとは？－』（凡人社、2016年）、共編著『未来を創ることばの教育をめざして－内容重視の批判的言語教育（Critical Content-Based Instruction）の理論と実践－』（ココ出版、2015年）、編著『日本語教育 学のデザイナー－その地と図を描く－』（凡人社、2015年）などです。これらの著作において、氏は社会的な視野から日本語教育学の学問的体系や日本語教育実践を捉え直しており、様々な立場で外国人の教育・支援に関わる人々にとって、大いに示唆に富む内容となっています。

また、神吉氏は、現在に至るまで文化庁の地域日本語教育アドバイザー、文化審議会国語分科会委員などを長く務め、国の日本語教育の制度設計にも深く関わってきました。個人としても、日本語教育に係る政策・制度に関し、外部機関や関係者と積極的に関係を構築し、その成果を発信しています。その一端は、日本語教育推進に関わる法律の成立へ向けた時宜を得た署名活動や議員等への働きかけにも現れています。グローバル化がさらに進む社会において、今後の日本語教育界を牽引するであろう貴重な存在です。

これまでの研究、実践、社会的活動での活躍に加え、今後のさらなる活躍に期待し、神吉氏に日本語教育学会賞を贈ります。

以上

2021年度 日本語教育学会 奨励賞

受賞者 こぐち ゆきこ
小口 悠紀子氏

【授賞理由】

小口悠紀子氏は2015年に広島大学大学院教育学研究科を修了されました。その後、首都大学東京、広島市立大学、広島大学で日本語教育の研究と実践を行ってこられました。第二言語習得の研究と TBLT (Task Based Language Teaching) の実践の双方において注目すべき成果を挙げている若手研究者です。

小口氏の研究は第二言語習得研究を出発点とし、特に学習者コーパスなどのデータを活用して、優れた研究を多数行っています。主な論文に「上級日本語学習者の談話における「は」と「が」の知識と運用—未出か既出かによる使い分けに着目して—」(『日本語教育』166号、2017年)、「談話における出来事の生起と意外性をいかに表すか—中級学習者と日本語母語話者の語りの比較—」(『日本語／日本語教育』8巻、2017年)などがあります。また、近年の共著「上級日本語学習者の作文に現れる「主述の対応関係の不具合」の実態—作文指導・学習の効率化を目指すための基礎研究—」(『日本語／日本語教育』12巻、2021年)は国語教育の観点も取り入れられており、画期的な研究と評価できます。

それと並んで、小口氏は初級段階からの TBLT アプローチによる教育実践に取り組むとともに、その成果を発信しています。中でも「大学の初級日本語クラスにおけるタスクベースの言語指導—マイクロ評価に基づく考察を中心に—」(『日本語教育』174巻、2019年)は教育実践者にとって気になる学習者の「声」を報告したものであり、構造シラバスの中でも TBLT のアプローチを試したい実践者にとって大いに参考になるものです。

また、東広島市在住の外国籍住民と市民をつなぐ防災学習支援という課題にも取り組み、外国籍住民参加型の防災・減災学習を企画、運営しています。さらにその取り組みにおける教材開発についても「地域日本語教室における防災・減災学習のための教材開発—初級・中級学習者を対象とした TBLT の実践を想定して—」(『人文学報』515巻7号、2019年)で報告されています。

その他、共著で日本語教育初学者向けの教科書である森篤嗣編著『超基礎・日本語教育』(くろしお出版、2019年)などを執筆したり、共著での単語帳、中俣尚己編著『ミニストーリーで覚える JLPT 日本語能力試験ベスト単語 N3 合格 2100』(ジャパントイムズ出版、2021年)を作成したりするなど、日本語教育の多方面にわたって活躍されています。

小口氏は量的アプローチと質的アプローチの双方を駆使して「研究と実践の往還」を実現しており、今後も日本語教育業界に多くの知見をもたらすことが期待されます。さらに防災などに代表される「地域の具体的な課題に取り組む」姿勢は、多くの日本語教育関係者のモデルになるものと言えます。これらの実績を評価するとともに、今後のさらなる活躍を期待して、小口氏に日本語教育学会奨励賞を贈ります。

以上

2021年度 日本語教育学会 功労賞

受賞者 うえの たづこ
上野 田鶴子 氏

【授賞理由】

上野田鶴子氏は、国立国語研究所や東京女子大学をはじめとして数多くの機関において、日本語教育に関わる学術研究活動と日本語教育の実践に取り組みられました。また、日本語教師の養成や研究者の育成、さらに、日本語教育の普及や教育環境の整備などにも、長年にわたり尽力されました。

日本の留学生教育の草創期から国際基督教大学などで日本語教育に従事するとともに、留学生教育に多大な影響を与えた共著『Modern Japanese for University Students』（国際基督教大学、1964・1965・1966・1968年）シリーズの開発を手がけられました。また、共著『日本語 はつおん』（国際交流基金、1978年）に加え、日本語非母語話者のための辞典の草分けである共著『外国人のための漢字辞典』（文化庁、1966年）や共著『外国人のための基本語用例辞典』（文化庁、1971年）といった辞典の編集にも携わられました。

研究活動としては、「A Tagmemic Approach to Japanese Syntax」（ICU、1967年）や「終助詞とその周辺」（『日本語教育』17号、1972年）、「日本語と外国語の照応現象に関する対照研究」（国立国語研究所、1984年）など、数多くの日本語および英語での論文を発表され、日本語教育研究の発展に寄与されました。また、研究代表者として行った「日本語教育における指導要素としての言語単位に関する研究」（1986-1987年度、科学研究費基盤研究(B)）は、指導要素を分類し、言語単位ごとに問題となる語法上・意味上の特性を明らかにしようとするもので、日本語教育の基盤作りという大きな役割を果たしました。一方、「外国人技術研修生の日本語学習の環境作りに関する調査研究」（1992-1994年度、科学研究費総合研究(A)）は、外国人技術研修生の日本人との関係構築やネットワーク形成過程を明らかにしようとするもので、ネットワーク形成にはボランティア的支援を行う日本人側のネットワークの存在が不可欠であることを示すとともに、日本語教室の開催等、市民自らが外国人に日本語を教える意味を考える場を提供する形の実践活動も行いました。

1970年代から90年代という日本語教育のいわば発展期において、国立国語研究所で日本語教員養成に尽力され、各種の研修事業や教員養成プログラムの開発と実施に取り組みられました。また、東京女子大学現代文化学部教授、放送大学客員教授を歴任し、日本語教育環境の整備と、日本語教育従事者のネットワーク構築、人材育成に尽力されました。さらに、この間、文部省学術審議会専門委員、国語審議会委員、国際交流基金運営審議会委員、外務省外部評価委員会委員、日本語教育研究所理事長など様々な要職を務められました。こうした長年にわたる社会的貢献と功労に対して、2005年には瑞宝双光章が授与されました。

学術的研究活動に加えて、日本語教育の基盤構築にも非常に大きな役割を果たしてこられた上野氏のこれまでの功績を称え、ここに日本語教育学会功労賞を贈ります。

以上

2021年度『日本語教育』論文賞受賞論文

モシは日本語条件文の理解を促進するのか

—自己ペース読文実験を用いた文処理過程から—〔研究論文〕

掲載号：『日本語教育』178号（2021年4月発行）、pp. 94-108

執筆者：市江^{いちえ あい}愛氏（東京都立大学）

【授賞理由】

本論文は、条件節にあらわれた副詞モシに注目し、モシの有無と出現位置が、条件節の理解にどのような影響を与えるのかを実験的な手法によって明らかにしたものである。実験は、4つの異なる言語（韓国語、英語、ドイツ語、中国語）を母語とする日本語学習者と日本語母語話者を対象とし、刺激文の選択や要因の統制などが緻密にデザインされたものである。そして、日本語母語話者については、モシの有無や位置によって、読み時間、正答率、回答時間のいずれにも有意な差がないのに対して、日本語学習者は母語に関わらず、モシがあることで文処理が促進され、読み時間が短くなり正答率も高くなるという結論が導き出されている。研究目的に則した緻密な方法と得られた結論の明快さが高く評価された。

(1) 日本語教育現場に対する示唆が具体的である。

言語形式の種類が多く、用法が多様で習得が難しい項目の一つであり、その概念自体の認知的負荷も高いとされている条件節について、モシという副詞がその文処理を促進し、その文理解の正確さを増すことを発見した点が画期的である。また、モシが条件文の理解に与える影響は学習者のL1に因らないことも明らかにした点は、日本語教育現場での実践のみならず、教材作成、日本語教師のための文法書など広範において日本語教育全般に寄与する論考である。

(2) 新しいテーマにチャレンジしている。

日本語の条件節が、「事実」と「仮説」という、一見、相反するように思われる2つの意味を表すことについては、文法研究においても、日本語教育の現場においてもすでに周知のことであり、それを前提に研究や実践が進められてきた。他方、副詞モシについては、これまで文法研究の中心的なテーマではなかった。本論文は、このような両者を極めて論理的、有機的に結びつけることにより、文処理へのモシの関与について考察したものである。

(3) 専門領域を超えて訴えるものがある。

心理言語学における文処理過程の知見と研究手法（自己ペース読文実験）を取り入れ、緻密にデザインされた実験である。この結果を踏まえて、筆者はモシを災害時のアナウンスなどやさしい日本語に応用することを提案している。研究の方法や分析の過程が、習得研究、文法研究の専門外の者にもわかりやすく、「やさしい日本語への応用」という提案も理解しやすく、説得力がある。

以上

受賞論文 要旨

モシは日本語条件文の理解を促進するのか —自己ペース読文実験を用いた文処理過程から—

日本語の条件文は従属節末に接続形式が置かれるため、従属節末になって初めて条件文だと分かる。一方で、モシという語句は条件文の成立に関係がなく、あってもなくてもよいが、必ず従属節末の接続形式に先行して置かれ、仮定的な条件文であることを明示する。そのモシの性質に着目し、本研究では日本語の仮説条件文の文処理過程において、モシの有無と位置が影響を与えるのか明らかにすべく、日本語話者と、四つの異なる言語をL1にもつ日本語学習者を対象に、自己ペース読文実験を行った。その結果、日本語話者にはモシの有無と位置で差はないが、日本語学習者はそのL1に関係なく、モシがあることで文処理が促進され、読み時間を短くし正答率を高くすることが明らかとなった。この結果は、第二言語習得研究における理解過程の解明に貢献するだけでなく、やさしい日本語への応用も考えられ、多文化共生が進む日本社会への有用な知見となり得るだろう。

Does moshi Facilitate the Comprehension of Japanese Conditionals?: An Examination of Sentence Processing Using a Self-Paced Reading Experiment

ICHIE Ai

In Japanese conditional sentences, the condition clause ends with a conjunctive particle that marks it as a condition, but that clause may also begin with the adverb moshi. The use of moshi is not essential, but when it is used it clearly indicates a hypothetical conditional. In that case, it has to be put before the conjunction. In this paper, I aim to clarify the effect of moshi's presence and position on the sentence processing of hypothetical conditionals in Japanese. To do so, I conducted a self-paced reading experiment with both Japanese native speakers and learners of Japanese having four different first languages. My results show that the usage of moshi had no effect on Japanese native speakers. However, for the learners, moshi can facilitate the processing of a text, shortening the reading time and facilitating correct answering regardless of the learners' first languages. These results might contribute not only to the comprehension study of Second Language Acquisition but also to the development of "Easy Japanese", which can be useful for supporting the development of multicultural understanding within Japanese society.

(Tokyo Metropolitan University)

2021年度『日本語教育』論文賞受賞論文

第二言語としての日本語語彙量と漢字力

—第一言語と学習期間の影響—〔研究論文〕

掲載号：『日本語教育』178号（2021年4月発行）、pp. 139-153

執筆者：まつした たつひこ 氏（東京大学）・ さとう なおこ 氏（千葉大学）・ ささ お ようすけ 氏（京都大学）
たじま 氏（中央学院大学）・ はしもと みか 氏（川崎医科大学）

【授賞理由】

本論文は、日本語の語彙量と漢字力とに関し学習者の第一言語と学習期間との影響等の視点から考察したものである。具体的には、日本語学習者に「漢字変換テスト」、および、「日本語を読むための語彙サイズテスト」を実施し、日本語を第一言語とする学生と第二言語とする学生の日本語語彙量と漢字力との比較、日本語を第二言語とする学生の学習期間と語彙量・漢字力との関係、第一言語や語種の影響等について考察している。設定された問題意識は日本語教育の語彙教育にとって今日的であり、得られた知見は日本語の語彙・漢字を巡る学習と教育に貢献するものである。また、その精緻な研究手法は、日本語教育学の学術的発展にも寄与するものと評価された。

(1) 日本語教育現場に対する示唆が具体的である。

日本語学習者の多様化が進み、いわゆる非漢字圏学習者も増加する中で、日本語教育のカリキュラムもニーズに応じた変革を余儀なくされてきた。本論文は、日本語学習者の属性やニーズに対応する日本語教育を考えるための基礎的データとして重要な意義を持つ。

(2) 新しいテーマにチャレンジしている。

非漢字圏の留学生増加を背景とした留学生の選抜基準の設定と運用、入学後のカリキュラムを含めた日本語学習支援に対して本論文のインパクトは大きい。語彙量は留学生の専門分野の学習や研究の質に大きな影響を与えるため、留学生の母語や日本語学習歴に即した内容での語彙学習が必要とされる。カリキュラム開発につながる調査を可能にする新たなテストが開発されたことは極めて意義深いものと考えられる。

(3) 専門領域を超えて訴えるものがある。

日本語を第一言語とする学生には、和語、漢語、外来語の順にやさしいという調査結果を、日本語を第二言語とする学生の結果と比較検討した上で、必ずしも和語の高頻度語に書き換えることが「やさしい日本語」につながるわけではなく十分な検討を要することが指摘されており、語彙・漢字の学習や教育にとどまらず、「やさしい日本語」によるコミュニケーションや多文化共生のための日本語を考える上でも重要な示唆に富む論文である。

以上

受賞論文 要旨

第二言語としての日本語語彙量と漢字力

—第一言語と学習期間の影響—

本研究では「漢字変換テスト」(KCT)を開発し、「日本語を読むための語彙サイズテスト」(VSTRJ-50K) (田島ほか, 2015; 佐藤ほか, 2017) と合わせて日本語 L2 学生を対象に実施した。日本国内の 3 大学における日本語 L2 学生では, 中国語 L1 学生の推定理解語彙量が平均 3 万語以上なのに対し, 非漢字圏出身学生は 2 万語に満たなかった。二つのテストの相関は高かったが, ラッシュ分析で VSTRJ-50K の一次元性が低かったため L1 グループ別に DIF 分析したところ, 各グループ内ではモデルへの適合度が増し, L1 によって難度の異なる語が多く存在した。特に語種による違いは顕著であった。1 語・1 漢字あたりの平均学習時間を検証したところ, 初級から中上級にかけて短くなっていき, 上級から超上級にかけて再び長くなることが明らかになった。L1/L2 の語彙力・漢字力を包括的に見たカリキュラム開発が必要である。

Vocabulary Size and Kanji Knowledge of Japanese as a Second Language:

Effects of the First Language and Learning Period

MATSUSHITA Tatsuhiko, SATO Naoko, SASAO Yosuke,
TAJIMA Masumi and HASHIMOTO Mika

In this study, a Kanji Conversion Test (KCT) was developed and implemented together with the Vocabulary Size Test for Reading Japanese (VSTRJ-50K) (Tajima et al., 2015; Sato et al., 2017) for university students who learn Japanese as a second language (JSL). Among JSL students at three universities in Japan, the estimated vocabulary size of Chinese-background students was 30,000 or more on average, while that of non-Kanji-background students was less than 20,000. Although the correlation between the two tests was high, the unidimensionality of VSTRJ-50K was low in the Rasch analysis. Accordingly, when DIF analysis was performed for each L1 group, the goodness of fit to the model increased within each group, and there were many words with different difficulty levels depending on L1. In particular, the differences depending on word origin were remarkable. Examining the average learning time per word/kanji revealed that it declined as learners progressed from beginner to intermediate and advanced, and then increased from advanced to highly advanced. Therefore, a comprehensive consideration of L1/L2 learners' vocabulary and kanji knowledge is necessary for curriculum development.

(MATSUSHITA: University of Tokyo, SATO: Chiba University, SASAO: Kyoto University,
TAJIMA: Chuo Gakuin University, HASHIMOTO: Kawasaki Medical School)

2021年度 日本語教育学会 学会活動貢献賞

受賞者一覧 (50音順)

【授賞対象】

2021年度は、2005年以降、学会の役員・代議員・旧評議員・委員として、一定の年数を歴任し、尽力のあった以下の皆さまに、学会活動貢献賞を贈ります。

いし い えり こ
石井 恵理子 氏

お の まさ き
小野 正樹 氏

かみよし ういち
神吉 宇一 氏

きむ ひよぎょん
金 孝 卿 氏

ちよん へ ぞん
鄭 惠先 氏

なかがわ かず こ
中河 和子 氏

以上